

嘘

新美南吉

青空文庫

久助^{きゆうすけ}君はおたふくかぜにかかつて、五日間学校を休んだ。

六日めの朝、みんなに顔を見られるのははずかしいなと思ひながら、学校にいくと、もう授業がはじまっていた。

教室では、案のじよう、みんながさあつとふりむいて久助君の方を見たので、久助君はあがつてしまつて、先生のところへ欠席届を出し、じぶんの席へ帰るまでに、つくえのわきにかけてある友だちのぼうしを、三つばかりはらい落としてしまった。さて、じぶんの席について読^{とく}本^{ほん}をひらいた。

となりの加市君^{かいち}が、いま習っているのは十課だということを指でさして教えてくれた。もう十課まで進んだのか。久助君は、八課の「雨の養老」を習っていたとき、なんとなく左のほおが重いのに気がつき、その日から休んだのだった。

じぶんが休んで家でねていたときに、みんなは八課ののこりと九課を習ったんだと思うと、久助君は、今ここにみんなといっしょに読本をひらいて、先生のお話を聞いていな

がら、みんなの気持ちとなじめないものを感じた。

そのとき、先生から指でさされて、前のほうのだれかが読本の朗読^{ろうどく}をはじめた。

「第十、稲むらの火^{いな}。これは、ただごとでないと、つぶやきながら、五兵衛^{ごへえ}は家からきた

……」

おや、へんだなど、久助君は思った。聞きなれない声だ。あんな声で読むのは、いったいだろう。そこで久助君は、本から顔をあげてみると、南のまどのそばの席で、ひとりの色の白い、セル地の美しい洋服をきた少年が、久助君の方に横顔を見せて朗読していた。久助君の知らない少年だ。

久助君はその少年の横顔を見ているうちに、きみのような錯覚^{さつかく}にとらわれはじめた。じぶんは、まちがってよその学校へきてしまったのではないかと、思ったのである。いや、たしかに、これは久助君の通っていた岩滑^{やなべ}の学校の五年の教室ではない。いま読んでいる少年を、久助君は知らないのだ。そういえば先生も、なるほど久助君の受け持ちだった山口先生ににはいるが、別人であるらしい。友だちのひとりひとりも、久助君のよく知っている岩滑の友だちとどこかににはいるが、どうも知らない学校の知らない生徒たちだ。五日間休んで、じぶんの学校を忘れてしまい、よその学校へはいってきたのだ。これはと

んでもないことをしてのけた。久助君は、そんなふうに思ったのだった。そしてすぐつぎのせつなに、やはりこれは久助君のもとの学校であるということがわかって、久助君はほつとした。

休けい時間がきたとき久助君は、森医院の徳一君とくいちにきいた。

「あれ、だれでエ」

南のまどぎわの色の白い少年は、まだ友だちができないのか、ひとりで鉛筆をけずつていた。

「あれかア」

と、徳一君はこたえていった。「あれは、太郎左衛門たろうざえもんで名だよ。横浜からきたアだけな」

「太郎左衛門？」

久助君はわらいだした。「年よりみたいだな」

徳一君の話によると、その転入生のほんとうの名は太郎左衛門というんだが、それではあまり年よりじみていて、太郎左衛門がかわいそうだから、子どものうちは太郎と家でもよんでいるので、子どもなかまでもそうよぶようにさせてくれと、一昨日、太郎左衛門をつれてはじめて学校へきたおかあさんが、先生にたのんでいったのだそうである。それを

聞いて久助君は、なるほど、おとなはうまいことを考えるものだと思った。

こんなぐあいには、太郎左衛門は、久助君の世界にはいつてきた。

二

岩滑^{やなべ}の学校はいなかの学校だから、なんといつても、都会ふうの少年はみんなの目をひくのである。久助君も最初から、なんとなく太郎左衛門に心をひかれたのだが、よい機会がないので近づけなかった。徳一君にしても、加市君にしても、音次郎君にしても——できのよい連中はみな、久助君と同じような気持ちなのだ。それが、おたがいにあまりよくわかつていたので、だれも手を出そうとしないのであった。で、久助君は、課業中にいつのまにか、太郎左衛門をじつとながめているじぶんに気づくことがあった。

太郎左衛門は、久助君より前の方の、南のまどぎわにいたので、久助君のところからはちようど、右の大きい目玉と、美しく光るかみの毛でとりまかれた、形のよいつむじが見えた。太郎左衛門は、その大きい目で、教科書の字を長いあいだ見ていては、おもむろに先生の方へ視線をむけて、話に聞き入っていた。どうかすると、課業にうんで、かすかな

といきをもらしながら、すこししせいをくずすが、またすぐ、熱心に先生の方をながめるのであった。それだけのことで、久助君には、太郎左衛門が、じぶんたちのように道のほこりや草の中でそだつてきたものではないことがわかり、太郎左衛門をすきにもなれば、なにかもの悲しい思いでもあったのである。

あるとき久助君は、いつものようにじぶんの席から、その美しい少年をながめていた。

それは、ひとりの美しい少年であった。この美しい少年は、いったいなんという名だろうと、久助君は思った。そしてすぐ、なアんだ、太郎左衛門じゃないかと、口の中でいった。

ふいと久助君は、まえに、江川えがわ太郎左衛門たろうざえもんというえらい人物の伝記を、ある雑誌で読ん

だことを思い出した。よくはおぼえていないが、江戸時代の砲術家ほうじゅつかで、伊豆いずのにらやま山に

反射炉はんしゃろというものをきずいて、そこで、そのころとしてはめずらしい大砲をちゅうぞう鑄造し

たという人である。そして、れんがを積みあげてつくつたらしい反射炉の図と、びっくりにした人のように目玉の大きい、ちよんまげすがたの江川太郎左衛門の肖像しょうざうが、久助君の頭にうかんだ。

この少年太郎左衛門は、あの江戸時代の砲術家の太郎左衛門と同じ名なのである。同じ名ならば、ふたりは同じ人間ではあるまいか。

しかし、そんなはずはない。第一、江戸時代におとなだった太郎左衛門が、現在、子どもになっているというわけがないのである。それでは、事の順序がぎやくというものだ。

久助君は、じぶんのばかげた考えをうちけした。にもかかわらず、久助君には、砲術家太郎左衛門と、この少年太郎左衛門が同一人物のように思えたのである。江戸時代におとなだった人間が、だんだんわかくなつて、いまは少年になっているのだ——さまざまな人間のなかには、そういうような特別な生きかたをするのが、ひとりやふたりは、いるかもしれない。目がぎよろりと大きいところは、この太郎左衛門もあの太郎左衛門もいっしょじゃないか。久助君は、そんなことをくちに出していえば、ひとが一いっしょう笑にふしてしまふことは知っていたので、ただじぶんひとりで空想にふけるだけであつた。

その日、学校から帰るとき、久助君は、太郎左衛門の三メートルばかりうしろを歩いていった。むろん久助君は、太郎左衛門のあとをつけていくつもりはないのだが、ぐうぜん、ふたりの帰る方向と歩く速度が同じであつたため、こういう結果になつてしまったのであると、ひとり弁解しながらついていった。

あき地のそばを通つてるとき、太郎左衛門は、ふいに久助君の方をふり返つて、「きみ、あの花、なんだか知つている？」

と、すこししゃがれた声で、流暢りゆうちやうにきいた。そつちを見ると、いぜんここに家があつたじぶん、花畑になつていたらしい一角に、小さな赤黒いさびしげな花が、二、三本あつた。

久助君は知らなかつたのでだまつていると、

「サルビヤだよ」

といつて、美しい少年の太郎左衛門は歩きだした。むこうが話しかけたんだから、こつちも話していいのだと思つて、久助君は、すこし胸をおどらせながら、

「横浜からきたのン？」

ときいた。横浜からきたことは、もう徳一君から聞いて知つていたから、いまさらきく必要はないのだが、ほかにはなにもいうことがなかつたのである。ところで久助君は、きいてしまつてから、ひやあせが出るほどはずかしい思いをした。というのは、「きたのン？」などということばは、岩滑やなべのことばではなかつたからだ。岩滑のことばできくなら、「きたのけ？」あるいは、「きたアだけ？」というところである。しかし久助君には、日ごろじぶんたちが使いなれている、こうしたことばは、この上品な少年にむかつて用いるには、あまりげびているように思えた。といつて久助君は、岩滑以外のことばを知っているわけ

でもなかった。そこで、どこのことばともつかない「きたのン？」などという中途はんばのことばが出てしまったのである。もし徳一君や、加市君や、兵太郎君など、日ごろのなまがいまのことばを聞いていたなら、あとで久助君は、背中をたたかれたりしながら、どんなにひやかされるかしないのだが、ありがたいことに、それを聞いたのは、太郎左衛門だけである。太郎左衛門はまだ、岩滑のことをよく知らないから、こんなことばも岩滑にはあるだろうぐらいに思つて、氣にとめなかったのであろう。

「ああ」

と、かれはこたえた。それからまた、赤い花の方を見ながら、

「ぼくのいさん、あれがすきだったのさ。画家なんだよ」

画家というのは絵をかく人であることぐらいは見当がつくが、じつさいの画家を見たことのない久助君には、こんな話に、なんと返事していいかわからないのである。

「おとしの秋ね、ベロナールで自殺しちゃったの」

自殺というのはじぶんで死ぬことだというくらいは、久助君にだってわかるが、そんなことばを使うものは、久助君のいままでのなかまには、ひとりもいなかったもので、ただもう、めんくろうばかりである。

じぶんの家の門の方へまがりかけた太郎左衛門は、なにか思いついたように久助君のところへもどつてきて、

「きみ、いいもんあげよう、手を出したまえ」

といった。久助君がもじもじしながら手を出すと、太郎左衛門は、小さい万年筆みたいなものをその上でふった。すると小さいみじん玉がひとつぶ、久助君のてのひらの上にこぼれ出た。太郎左衛門はじぶんのてのひらにもふり出すと、それを口の中へほうりこんで、門の方へいつてしまった。久助君は、はじめ、くうきじゆう空気銃で使うみじん玉かと思つたが、みじん玉にしては、てのひらにこころよい感じをあたえるあの重みがないので、別のものだと考えた。そして、ともかく太郎左衛門のまねをして、口の中に入れてみた。

舌の先でしばらくまわしていると、にがいまずいしるがとけて出たので、なんだ、こんなもん、かぜのとき飲まされるトンプクの玉みたいじゃないかと思つて、はき出そうとした。するととたんに、そのにがかったものが、すずしいあまさに変わつて、じつに口の中が爽快そうかいになつたので、久助君はひとりで、クツクツとわらいだしてしまった。なんだ、こんなもんか。ハツカのもとというようなものなんだな。しかし、すぐにまた、舌の先がにがみをおぼえはじめ、久助君は顔をしかめずにはおれなかった。しかし、いまにまた、

すずしくあまくなるだろうと思つて、がまんしていた。はたして、まもなくそのとおりになった。これで久助君には、この玉のしかけがわかった。にがくなったり、あまくなったり、交互こうごにくり返すようになっていたのだ。ところで、三どめににがくなってきたとき、久助君はもういやになつて、はき出してしまった。それはとけて、茶色のつばになつていった。はき出したあとで口をあけて空気をすいこむと、これはまた、なんという爽快そうかいなことでだろう！ 久助君の小さな口の中に、すずしい秋の朝が、ごっそりひとつはいりこんだみたいだ。久助君はその爽快味そうかいみを満喫まんきつするため、大きく口をあけて、ハアーツハアーツと呼吸しながら、家までできてしまったのである。

「なんだい、久は。仁丹じんたんのにおいをさせてるじゃないか」

と、おかあさんがいった。そこではじめて久助君は、なぞがとけて、そして、ばからしくなつてしまった。仁丹なら、久助君は百も知つていたのだ。もっとも、たべたことは、こんどがはじめてだけだ。

どうしてまた久助君は、ありふれた仁丹なんかを、なにかたいへんな、ふしぎなもののように思いこまされてしまったんだろう。思えば思うほど、久助君にとって、太郎左衛門はきみような少年であつた。

三

道から十メートルばかりはいったところに、太郎左衛門の屋敷やしきの門がある。光蓮寺こうれんじの山門をすこし小さくしたような、さびた金具などのついた古めかしい門である。横に小さいくぐりがあつて、太郎左衛門はそれから出はいりし、門はいつでもしまっている。

太郎左衛門といっしょにそこまできて、太郎左衛門が、「しっけい」とか、「さよなら、またあした」などといって、そのくぐりからすつと中へはいり、あとにびったりくぐり戸もしめられてしまうと、久助君は、いったいこの門の中で、太郎左衛門はどんなことをしているのだろう、おとなのことばでいえば、どんな生活をしているのだろうと、ちよつと思ふのであつた。しかし、あまりその中にはいつてみたいとは思わなかつた。

なにしろ、ばかにしんかんとしているのである。古めかしくてしんかんとしている——、そういうところを、久助君はこのまないのだ。

あるとき久助君は、太郎左衛門についてその門の中にはいった。

庭はあんがいせまかつた。だが、久助君の目をひきつけたものがそこにあつた。まつ四

角な深い池で、底の方に緑色のにぎった水がよどんでいた。四方の石がきにはこけがいつぱいついて、石の色はすこしも見えない。つまり、この一升ますのような形の池は、なからなにもで緑色である。そして水の中には、こいがあるらしい。ところどころ、水の緑色の中に、ぼんやりした赤や、白がみとめられるのは、たしかにそれだ。久助君はしばらくのぞいてみると、なまぐさいいやなおいが鼻につきはじめた。そればかりか、この池全体が、なにか、子どもによそよそしい感じをもっていることがわかったので、じきそばをはなれてしまった。

久助君は、招かれてふじの花のさいている縁側えんがわの方へいった。縁側とざしきはあかり障子しょうじでへだてられていたが、太郎左衛門が中から出てきたとき、あけっぱなしでおいだところから、久助君は中をのぞくことができた。

久助君はそこに、ひとりの黄色いしごきをした少女を見た。きつと、太郎左衛門のねえさんであろう。顔色が茶わんのように白くて、やせていた。彼女は、座敷のもうひとつおくの暗いへやから、金魚ばちほどのほやのついたランプをかた手で持ち、もう一方の手でふすまをなでながらあらわれ、座敷のすみにおいてあるつくえをさぐりあてると、その上にランプをすえた。目を大きく見ひらいているのに、手さぐりでそんなことをしていると

ころをみると、あきめくらなのだろう。なんにしても異様な光景である。久助君は、いきをのんで見つめていた。

つぎに少女は、マツチをすってランプに火を入れた。そしてつくえの前にすわると、だれもないのに、つくえのむこう側にだれかいでもするように、

「おとうさんが、はじめての航海でフランスのマルセーユにいったとき、その港のうら町の小さな道具屋で見つけたランプなんですって。なんでも、ルイ十六世のころのものらしいっていつてらしたわ」

と、しゃべった。久助君はぶきみになって、身じろぎもできなかった。この少女は、あきめくらであるばかりでなく、気がくるつているのだろう。

太郎左衛門がわらいながら、「ねえさんのばかタン」と前おきして、わけを話してくれたので、なんだ、そうだったのかと、久助君は思った。太郎左衛門のねえさんは、女学校きようだでする学芸会の練習をしていたのである。なんでもそれは、あらしの夜、ふたりの姉妹きょうだいが勉強をしていると、ふいに停電してしまうので、古いランプを持ち出してきてともすのだそうである。そうすると、死んだ弟やら、いぜんなくした手まりやら、雨の晩にいたなくなってしまった飼犬やらが、またふたりの姉妹のところにもどってくるという、な

にがなにやらわけのわからない、ばかばかしい劇らしい。

久助君は、そこにいる白い少女が、あきめくらでも気持ちがいいでもないことがわかったけれど、でもなんとなくきみがわるくて、しぜんに、目や耳は少女の方にひきつけられた。

彼女は、つくえのむこうの、すがたも見えなければ返事もしない人に、話をしつづけていた。

「アキ坊^{ぼう}ちゃんはね、死んじやったの。もう五、六年もまえの雪のふった晩に」

相手の人がなにかこたえているらしい。それが久助君にはきこえないが、彼女にはきこえるとみえて、耳をたてて聞いている。そしてまたいう。

「この子、死ぬってこと知らないんだわ。死ぬってね、かくれんぼうでどっかへかくれて、いつまで待っても出てこないようなもんよ」

すがたの見えない相手がなにかいうらしい。すると彼女は、なにかおかしい返事を聞いたのだろう、とつぜんクツクツクツとわらいだした。そしてこのわらうのが、じぶんで満足のいくようにできないとみえて、彼女はなんどもやりなおした。「クツクツクツ」とか、「ウフツフツフツ」とかいつて。

久助君はもうがまんがでしなかつた。すぐ家へ帰ってしまった。

それからしばらく、久助君は、太郎左衛門の屋敷の門の前を通るときにはきつと、ふじの花のさいている明るい昼間だというのに、ランプをつけて学芸会の劇を練習している、色の白いぶきみな少女のことを思い出したのである。

四

だんだん太郎左衛門は、みんなと親しくなった。みんなは最初のうち、太郎左衛門を尊敬して、すこしいいにくかったけれど、「太郎君」とよんでいた。

やがて太郎左衛門は、みんなといっそう親しくなつて、みんなにとりかこまれ、よつばらのように下品にしゃべりちらしていることもあつた。するとみんなは、太郎左衛門を尊敬したりするのはふさわしくないことがわかり、えんりよなく、「太郎左衛門」とよぶようになった。

そのうちにみんなはもう、「太郎君」とも、「太郎左衛門」ともいわなくなつてしまつた。というのは、太郎左衛門は、つきあつてもいっこうおもしろくない、つまらないやつだということが、みんなにわかつてしまつたからである。

はじめから今にいたるまで、「太郎君」というれいぎ正しいよびかたをつづけている人が、ただひとりあった。それは、受け持ちの山口先生である。

太郎左衛門がうそをつくといううわさがたちはじめたのは、そのころであつた。

「あんなやつのはことは、なんにも信用できん」

というものもあつた。久助君は、そんなこともあるまいと思つた。しかし、あるいはそんなのかもしれないと思つた。

ある日、兵太郎君が五、六人のなかまにむかつて、なにか一生けんめいにふんがいていた。久助君がなんだろうと思つてききにいくと、こうだつた。

兵太郎君が、太郎左衛門に一ぱいくわされたというのである。午ガ池うまの南の山の中に、深くえぐられた谷間がある。両側のがけが、ちょうど、びようぶを二まいむかいあわせて立てたようになっている。太郎左衛門は、そういうところならとてもおもしろいことができる、兵太郎君にいったのだそうである。つまり、かた一方のがけの上からむこうのがけにむかつて、「おーい」とひと声よびかけると、それがこだまになってこちらへ帰ってくる。そして、こちらのがけにぶつかるや、またこだまになって、むこうのがけに帰っていく。むこうにぶつかつて、また帰つてくる。こちらにぶつかつてまたむこうへいく。そ

うして、いつまでもそのひとつの「おーい」は、消えないのだという。ある科学の雑誌に書いてあったからほんとうだと、太郎左衛門はあかしまでたてたのだそうだ。それならほんとうだろうと思つて、兵太郎君は、きのう午^{うま}ガ池へつりにいったついでに、例のところまでいって、ためしてみたのである。そして、太郎左衛門のことが「うッそ」であることがわかったというのであつた。

これじゃたしかに、太郎左衛門はうそつきである、久助君は思った。するとどうしたわけか、学芸会のけいこをしていた太郎左衛門のねえさんを思い出した。だれも相手がないのに、じつさいにいるようにじょうずにしゃべっていた、あの白い少女のことを。

またあるとき、こんなことがあつたそうである。雨をともしたはげしいかみなりが、頭の上をすぎていったあと、太郎左衛門が新一郎君に、

「いま、雲の中からひばりが一わ、かみなりにうたれてむこうに落ちたから、見にいこう。きつと、牛市場のあたりに落ちている」

と、声はずませていった。新一郎君は、まさかうそとは思わなかつたので、ついていつて、まだぬれている牛市場の草をふみわけふみわけ、すみからすみまでさがしたが、牛のふんしか落ちてなかつたそうである。これも、太郎左衛門のうそであつたわけだ。

五

太郎左衛門が学校へ、どびんのふたぐらいの大きさの、まるいへんなものを持ってきて、「これね、とつてもおもしろいんだよ」

といった。

みんなは、太郎左衛門がうそつきであることは承知していたが、いつでもそれを警戒しているわけにはいかなかった。ことに、こんなぐあいに、めずらしいものを持ってきたときには、つい、好奇心のため、ゆだんしてしまうのである。

太郎左衛門の説明によれば、そのまるいものはゾウゲでできていて、シナ人が横浜で売っていたのだそうである。そいつを、耳にうまいぐあいにあてていると、音楽がきけるしかけになっているというのである。

まず、森医院の徳一君からはじめて、みんなは、それを順番に耳にあてがってきいた。

みんなが、聴診器ちようしんきを耳にしている医者のように、しんちようなおもちできいていると、

太郎左衛門は、

「ね、きこえるだろう。マンドリンみたいな音が。あれ、シナの琴ことなんだって」

といった。すると、「う、うん」と、なま返事するものもあった。「うん、ちいせい音だなあ」といつて、につこりするものもあった。「きこえやしんげや」といつて、二、三どふつて、またあてがってみるものもあった。

「また、太郎左衛門のうそだア」

と、太郎左衛門がいるのにそういつたものがあつた。それは兵太郎君であつた。しかしこの場合、みんなはむしろ兵太郎君を信じなかつた。というのは、兵太郎君は、十日ほどまえから、かたほうの耳が耳だれで、いやなおいのする緑色のうみをだらりとたらしつたので、みんなが、例の音楽の道具をかそうとしなかつたため、くやしがつていたからである。

久助君の番がきた。うけとつてみると、黄色なつるつるの美しいゾウゲである。どびんのふたのように、一方がくぼんでいる。そして、くぼんだところのまん中に、小さいへそみたいなものがとび出ている。そのへそを、うまく耳のあなにはめこんできくのだそうである。

「うーう」と、モートルのうなつているみたいな音が、はじめきこえた。その「うーう」

のなかに、マンドリンの音がまじってやしないかと、一心ふらんにきいていると、なるほどかすかに、ピンピンペンペンというような音がきこえるような気がする。

「うん、きこえるきこえる」

と久助君はいつて、つぎのものにわたしたのであった。

それからまもなく、あしたは春の遠足という日に、久助君はじしゃくをさがすため、茶だんすの引き出しをみなひっぱり出して、いろんなガラクタのなかをかきまわしていた。すると、なかから、太郎左衛門が持っていたのと同じゾウゲのまるい道具が出てきた。

「うちにも、これがあつたんだなア」

といつて、おとうさんにきいてみると、それは、いぜんたばこをのむ人が持っていた、火ざらというものだそうである。そのさらの上に、まだ火のついているすいがらをのせておき、つぎのたばこにすいつけるための道具なのだそうである。

「それでも、ここにこんなへそみたいなのがあるのは、どういうわけだん？」

と、久助君は、あまりのばかばかしさに、すこしはらをたてていった。そのへそには小さいあながあつて、そこにひもを通したにすぎないと、おとうさんは教えてくれたので、もう久助君は、なにもいうことがなかった。まんまと、太郎左衛門に一ぱいくわされたので

ある。

それにしても、なぜ太郎左衛門は、あんなうそをつくのだろう。なんというわけのわからぬやつだろう。

よく日、久助君は、教室のまどにもたれてぼんやりしているうそつきの太郎左衛門の顔を、かれに気づかれぬよう、こちらの人がけから、まじまじとながめていた。そして、さらにきみようなことを発見したのである。

それは、太郎左衛門の目は、左右、大きさがちがうということである。右の目は大きい。左は小さい。そして、そのうえおかしいことに、大きい目は、美しい、なごやかな、てんしんらんまんな心をのぞかせているのに、小さい目は、いんけんで、ひねくれていて、狡こ猾うかつなまたたきをするのである。

こいつはへんだと、久助君が一生けんめい見ていると、さらに、耳も左右大きさと形がちがい、鼻でさえも、左の小鼻と右の小鼻はちがっているのですこしゆがんで見えることがわかった。

久助君は考えた。——太郎左衛門は、ひとりの人間じゃなくて、ふたりの人間が半分ずつよりあつてできているのじやあるまいか。いぜん、久助君は、ねんどで人形を製造する

のを見たことがある。まず、ふたつの型によって、人形は、半分ずつつくられ、それからふたつの半分がうまく合わさって、ひとつの人形になるのであった。神さまがわれわれ人間をつくり出すのも、あれと同じ方法をするのだろう。そして、太郎左衛門はなにかのまちがいで、大きさのちがう、うまく合わない半分ずつが合わさってできたのかもしれない。だから、太郎左衛門の中には、ふたりの人間がはいっているのだ。

——それなら、太郎左衛門が平気でうそをいったり、なにを考えてるのかわけがわからなかったりするの、当然のことだと、久助君は思った。

六

ついに、みんなが太郎左衛門のうそのため、ひどいめにあわされるときがきた。それは、五月のすえのよく晴れた日曜日の午後のことであつた。

なにしろ場合がわるかった。みんなが——というのは、徳一君、加市君、兵太郎君、久助君の四人だが——たいくつでこまっていたときなのだ。

麦畑は黄色になりかけ、遠くからかえるの聲が、村の中まで流れていた。道は紙のよう

に白く光を反射し、人はめつたに通らなかつた。

みんなは、この世があまり平凡なのにうんざりしていた。どうしてここには、小説のなかのように出来事がおこらないのだろう。

久助君たちは、なにか冒険みたいなことがしたいのであつた。あるいは、英雄のような行為こういをして、人びとに強烈な感動をあたえたいのであつた。

そう思っているところへ、その道角みちかどから、太郎左衛門がひよつこりとすがたをあらわしたのである。そしてかれは、まっすぐみんなのところへくると、目をかがやかせていった。

「みんな知つてる？　こんど、大きくじらしんまいこが、新舞子で見世物になつているとき。なんでも、十メートルほどもあるんだつて」

なにかできごとがあればいいと思つていたやさきだから、みんなは、太郎左衛門のことばだつたけれど、すぐ信じてしまった。そしてまた、これはまんざらうそでもなさそうだった。なぜなら、新舞子の海岸には、そのくじらがないとしても、よく見世物がきいてゐることは、夏、海水浴にいったものなら、だれでも知っている。

見にいこうということに、一ぺんで話がきまつた。新舞子といえ、知多半島のあちら

側の海岸なので、峠をひとつ越していく道はかなり遠い。十二、三キロはあるだろう。しかし、みんなのからだの中には、力がうずうずしていた。道は、遠ければ遠いほどよかったのだ。

太郎左衛門も加えて一行は、すぐその場から出発した。家へそのことをいってこのようなと思うものは、ひとりもなかった。なにしろ、からだはつばめのようにかるかった。つばめのように飛んでいって、つばめのように飛んで帰れると思っていたのである。

とんだり、かけたり、あるいは、「帰りがくたびれるぞ」などと、かしこそうにおたがいを制しあつて、しばらくは、正常歩で歩いたりして、進んでいった。

野には、あざやかな緑の上に、白い野ばらの花がさいていた。そこを通ると、みつばちの羽音がしていた。白っぽい松の芽が、におうばかりそろいのびているのも、見ていった。半田池をすぎ、長い峠道をのぼりつくしたところから、みんなは、沈黙がちになってきた。そして、もしだれかがしゃべっていると、それがうるさくて、はらだたしくなるのである。知らないうちに、みんなのからだに、つかれがひそみこんだのだ。

だんだん、みんなは、つかれのため頭のはたらきがにぶってきた。そして、あたりの光が弱つたような気がした。じつさい、日もだいぶん西にかたむいていたのだが、それでも、

もうひきかえそうというものは、だれもなかった。まるで命令をうけているもののように、先へ進んでいった。

そして大野の町をすぎ、めざす新舞子しんまいこの海岸についたのは、まさに、太陽が西の海にぼつしようとしている日ぐれであつた。

五人はくたびれて、みにくくなつて、海岸に足をなげ出した。そして、ぼんやり海の方を見ていた。

くじらはいなかった。また、太郎左衛門のうそだつた！

しかしみんなは、もう、うそであろうがうそでなからうが、そんなことは問題ではなかった。たとい、くじらがそこにいたとしても、みんなはもう、見ようとしなかったらう。

つかれのために、にぶつてしまったみんなの頭のなかに、ただひとつ、こういう思いがあつた。

「とんだことになつてしまった。これから、どうして帰るのか」

くたくたになつて、一步も動けなくなつて、はじめて、こう気づくのは、分別ぶんべつがたりないやりかたである。じぶんたちが、まだ分別のたりない子どもであることを、みんなはしみじみ感じた。

とつぜん、「わッ」と、だれかなきだした。森医院の徳一君である。わんぱくものでけんかの強い徳一君が、まっさきになきだしたのだ。すると、そのまねをするように兵太郎君が「わッ」と、同じ調子でなきだした。久助君も、そのなき声を聞いているとなきたくなってきたので、「うふうふン」と、へんななきだしかただったが、はじめた。つづいて加市君が、ひゅつといきをすいこんで、「ふえーん」とうまくなきだした。

みんなは声をそろえてないた。するとみんなは、じぶんたちのなき声の大きいのにびつくりして、じぶんたちはとりかえしのつかぬことをしてしまつたと、あらためて痛切に感じるのであつた。

そして、四人はしばらくなくていたが、太郎左衛門は、ひろつた貝がらで、足もとの砂の上にすじをひいているばかりで、なきださないのであつた。

ないていない人のそばでないているのは、ぐあいのわるいものである。久助君はなきながら、ちよいちよい太郎左衛門の方を見て、太郎左衛門もいっしょになければよいのにと、思った。こいつはなんというへんな、わけのわからんやつだろうと、またいつもの感を深くしたのである。

日がまತ್ತたくぼつして、世界は青くなつた。最初に、久助君のなみだがきれたので、な

きやんだ。すると、加市君、兵太郎君、徳一君という、なきだしとはぎやくの順で、せみが鳴きやむようになきやんでいった。

そのとき、太郎左衛門がこういった。

「ぼくの親せきが大野にあるからね、そこへいこう。そして電車で送ってもらおう」

どんな小さな希望にでもすがりつきたいときだったので、みんなはすぐ立ちあがった。しかし、それをいったのが、ほかならぬ太郎左衛門であることを思うと、みんなはまた、力がぬけるのおぼえたのである。もしこれが、だれかほかのものがいったのなら、どんなにみんなは勇気をふるいおこしたことだろう。

やがて、大野の町にはいったとき、みんなは不安でたまらなくなったので、

「ほんとか、太郎左衛門？」

と、なんともきいた。そのたびに太郎左衛門は、ほんとうだよ、とこたえるのであったが、いくらそんなこたえを得ても、みんなは信じることはできなかった。

久助君も、太郎左衛門をもはや信じなかった。——こいつは、わけのわからぬやつなのだ、みんなとはものの考えかたがまるでちがう、別の人間なのだと、思いながら、みんなにたちまじっている太郎左衛門の横顔を、するどく見ていた。すると、太郎左衛門の顔は、

そつくり、きつねのように見えるのであった。

町の中央あたりまでくると、太郎左衛門は、

「ううんと、ここだったけな」

などとひとりごとしながら、あつちの細道をのぞいたり、こつちの路地ろじにはいたりした。それを見ると、ほかの四人は、ますますたよりなさを感じはじめた。また、太郎左衛門のうそなのだ。いよいよ絶望なのだ。

しかし、まもなく太郎左衛門は、ひとつの路地からかけだしてくると、

「見つかったから、こいよ、こいよ」

と、みんなを招いたのである。

みんなの顔に、暗くてよくは見えなくつても、さアと生気の流れたのがわかった。足がぼうのようにつかれているのも忘れて、みんなはそっちへ走った。

いちばんあとからついていきながら、久助君は、だが待てよと、心の中でいった。あまり有頂天うちようてんになると、幸福ににげられるという気がしたからであつた。なにしろ、あいては太郎左衛門なのだから、真まにうけることはできないはずだ。

そう考えると、またこんどもうそのように、久助君には思えるのであった。

そして久助君は、時計をならべた明るい小さい店のところにくるまで、太郎左衛門をうたがっていた。しかし、そこが、ほんとうに太郎左衛門の親せきの家だった。

太郎左衛門からわけを聞いておどろいたお婆さんが、

「まあ、あんたたちは……まあまあ！」

と、あきれてみんなを見わたしたとき、久助君は、救われたと、思った。すると、きゆうに足から力がぬけて、へたへたとしきいの上にすわってしまったのであった。

それから五人は、時計屋のおじさんにつれられて、電車で岩滑^{やなべ}まで帰ってきたのであったが、電車の中では、おたがいにかradをすりよせているばかりで、ひとこともものをいわなかった。やすらかさと、つかれが、からだも心も領^{うけ}していて、なにも考えたくなく、なにもいいいitくなかつたのである。

うそつきの太郎左衛門も、こんどだけはうそをいわなかった、と、久助君は、そこにはいつたときはじめて思った。死ぬか生きるかというどたん場では、あいつもうそをいわなかつた。そうしてみれば、太郎左衛門も、けつしてわけのわからぬやつではなかつたのである。

人間というものは、ふだんどんなに考えかたがちがつているわけのわからないやつでも、

最後のぎりぎりのところでは、だれも同じ考えかたなのだ。つまり、人間はその根もところでは、みんなよくわかりあうのだということが、久助君にはわかったのである。すると久助君は、ひどくやすらかな心持ちになって、耳の底にのこっている波の音を聞きながら、すつとねむってしまった。

青空文庫情報

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1974（昭和49）年1月30日12版発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：ゆうい

2000年1月27日公開

2006年1月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

嘘

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>